

ハイ デイ

(第十七回)

津 田 芳 雄 譯

——お醫者様はこの突然の申し出に、びつくりして異議を申し立てようとしたが、ゼーゼマン氏は自分のこの考へが非常に氣に入つて、有無を云はせず腕をつかんでクララの部屋へ連れ込んでしまつた。クララはいつも面白いこゝを云つてくれるこの親切なお醫者様が大好きで、大喜びで迎へた。最も近頃はすうつとお醫者様は沈鬱な顔をつづけ、クララにはそのわけがわかつてゐるだけに、もみのやうな元氣なお醫者様にしてあげる爲めには、どんなこゝでもしたいと思つてゐた。お醫者様が近よつて来るに、クララは手を差し出した。お醫者様はその枕もきに坐り、お父様も竝んでかけた。お父様はクララの手をさりながら、早速スミス行きのこと話を話し出した。お父様自身もずる分樂しみにしてゐただけで、クララの今の

様子ではとても無理だ云ふ一番重なるこゝろでは、クララの泣き出すこゝろを恐れて、出来るだけ大いそぎで通り過ぎ、矢繼ぎ早やに、お醫者様に代りに行つていたゞくさいふ新しい計劃をのべ、それはお醫者様からだにも、みんなにかよいこゝだらうさいふこゝろでは、わざとゆつくり力を入れて話した。

——クララは泣くまいこゝろ一生命がまんしたが、涙がみる／＼碧い眼にあふれて來た。長い病中すつこそればかり樂しみにして來た旅行を、思ひ止まらねばならないとは、ほんたうにがっかりしてしまつた。けれどもお父様がいけないと仰しやるのは、よく／＼ためにならないからださいふこゝろを、クララはよく知つてゐたので、涙をのみ込んで、もう一つだけ残された希望の方へ心を向

けようとした。お醫者様の手をさすりながら、クララは一生懸命にたのんだ。

「ねえ先生、ハイデイに逢ひにいらしつて下さいな。そして、お山の上はみんな風だか、ハイデイやおぢいさんや、それからペーテルや山羊が、いちんち何をしてゐるか、すつかり見ていらしつて、お話しして下さいな。あたしはその人たちみんなも、とても仲よしなんですもの。それから、ハイデイとおばあさんに、お土産をあげて頂戴。すつせせんから、あたしが持つて行かうと思つて、上げるものを考へてありますのよ。ねえ先生、いらしつて頂戴。そしたらあたし、いくらでも肝油をのみますわ」

この肝油をのむお約束がお醫者様に決心をつけさせたのかさうかはわからないが、さもなくお醫者様はたうとう笑ひながら云つた。

「それぢやさうしても行かなくちやならなくなりましたね、お嬢さん。あなたはその間に、うんち肥えて丈夫になつて、お父様やわたしを喜ばせて下さるのですよ。それで、いつ發つここにしませうかね」

「あしたの朝——早い方がいい！」

「ああ、それがよろしい。お天氣はよし、空は青いし、一刻の猶豫もありません。かういふ日に山へ出かけないなんて、實際勿體ない話ですよ」

ゼーゼマン氏も口を挟んだ。お醫者様はたうとう噴き出してしまつた。

「おやおや、これぢやうつかりしてるさ、今度はまだ向ふへ着いてゐないさいつて、お叱りを受けさうですな。さあ歸つて支度でもはじめませう」

けれどもクララは次から次へにハイデイへのおこまつてを頼んだり、よく見て来て、歸つたら委しくお話ししてくれさせがんだりして、なかくお醫者様を放さなかつた。お土産はロツテンマイアさんに詰めてもらはねばならないので、今はロツテンマイアさんが町へ出掛けてゐて留守だから、あそこでお醫者様のところへ届けることにした。お醫者様は、なにもかもクララの云ふ通りにするこゝを約束した。

召使ひさいふものは、伝附けれないこゝまでちやんち前から嗅ぎ付ける不思議な力を持つてゐるものらしい。セバステチャンもティネットも、多分にこの力を持ち合はせてゐるを見へ、まだお醫者様が階段を降り切つてしまはないうちに、ティ

ネッテはベルの音を聞いてクララの部屋に這入つて来た。

「あの箱に、コーヒーの時いたゞくお菓子をいっぱい入れて来て」

クララはずつと前から用意してあつた箱を指さして云つた。

ティネッテは馬鹿にしたやうにその箱を片手でぶら／＼振りまはしながら、部屋を出て行きさま、生意氣らしくつぶやいた。

「なんだ、こんな御用か」

セバスタンはお医者様を送り出して、おじぎをする時云つた。

「さうかあの小つちやなお嬢さんに、わたくしからよろしくお仰しやつて下さいまし」

「よろしい。だが、それちやわしが旅行するこゝを、もうちやんと知つてゐるのだね」

セバスタンはぎぎまぎして、不細工な咳拂ひをしながら、

「わたくしは、その——なに、何でもございません。ちよつと、その——食堂の前を通りました時に、あのお嬢さんの名前が耳に入りましたので、その、多分そんなこゝだらうと思ひ合はせまして

——つまり——」

「よしよし」

お医者様はほほゑんだ。

「思ひ合はせれば、する分いろんなこゝがわかるものだからね。まあ行つて来るよ。御機嫌よう。こゝづけは確かに引き受けたよ」

そして急いで歸らうとするこゝ、又一つ障物に出逢つた。ひどい風で、ロツテンマイアさんが散歩を切り上げて歸つて来て玄關を這入らうとしたのこゝ、お医者様が出ようとしたのこゝが、丁度一緒だつたのである。ロツテンマイアさんの白い肩掛けは、風を一ぱいに孕んで、帆かけ舟のやうだつた。お医者様は身を退いた。けれどもロツテンマイアさんは普段からこのお医者様には特別の尊敬の好意を寄せてゐたので、あなた様こそさうぞお先きに、ミ大げさな鄭重さで、これも身を退いた。かうして互ひにゆづり合ひながら立つてゐるこゝ、急に強い風がさつと吹いて来て、ロツテンマイアさんは帆かけ舟の姿のまゝで轉がり込んで来て、も少しでお医者様を鉢合せするこゝろだつた。ロツテンマイアさんはしばらく息を入れて氣を落ち付けてからでないこゝ、相當の禮儀をつくらうとて挨

擲するこゝが出来なかつた。そして、こんなはしたない格好で轉がり込んで來ねばならなかつたこゝを、ひきく氣にしてゐるが、お醫者様は人の氣のむしやくしやしたのまで上手になほすこゝを心得てゐるので、ロツテンマイアさんもいつの間にか普段の落ち付きを取り戻して、今度の旅行の話に聞き入つてゐた。お醫者様は持ち前のおだやかな聲で、さうかハイディへのお土産を詰めてやつて下さい、あなたでなくては外の者には出來ないのですからミ頼んでおいて、別れを告げた。

クララはハイディにお土産をこまづけるこゝをロツテンマイアさんに承知させるには、一ミ悶着あるだらうミ覺悟をきめてゐた。ミこころが今度に限つて、ロツテンマイアさんはいつになく上機嫌ですぐ承知した。大きなテーブルを片付けてハイディへのお土産をみんなその上にひろげ、クララの見てゐる前でそれを詰めた。品物はひみつびみつ大きさが違ふので、それを手際よく詰めるのは並大抵な仕事ではなかつた。まづ、温い頭巾のついた外套があつた。これはハイディが冬の間おばあさんの所へ行くのに、おぢいさんが麻袋にくるんで連れて行つてくれるのを待つてゐなくても、

いつでも行きたい時に行けるやうにミ、クララが自分で工夫して拵へさせたものである。それから、おばあさんにあげる温い厚い肩掛けがあつた。これにくるまつてゐれば、もう恐ろしい風が家のまはり吹きすさんでも、おばあさんは寒がらなくともいゝだらう。その次ぎは、お菓子のいつぱい這入つた大きな箱だつた。これもおばあさんにあげるもので、コーヒーの添へて食べてもらふつもりだつた。今度は大きな腸詰めである。これははじめ、ペーテルにやるつもりだつたけれど、さうするミペーテルがうれしまぎれに一度にみんな食べてしまつてお腹をこわすミいけないミ思ひ直し、クララはお母さんのブリギッタに渡してもらふこゝにした。さうすれば、ブリギッタは自分も食べ、おばあさんにもあげて、ペーテルにも程よく分けてやつてくれるだらうから。タバコの包みは、おぢいさんへのおみやげである。おぢいさんは夕方腰かけて煙管パイプをくゆらすのがミてもすきださうだから、おしまひに、何だか不思議な小さな袋や包みや箱が、たくさんあつた。ハイディがこれを一一つ開けて見る時、ぎんなにびつくりして喜ぶだらうミ、クララが特別楽しみにして、集

めたものばかりだった。

さて、仕事はやつごおしまひになり、物々しい大きな包みが、もう送るばかりになつて床の上におかれた。ロツテンマイアさんは自分の手際よい詰め方をうつごりご満足げに見やつた。クララもこの大きな包みが小屋に届いた時のハイデイのびつくりして喜んで跳び上るさまを想像して、うれしさうに眺めてゐた。

やがてセバスチャンが這入つて来て、この包みをついで、すぐさまお醫者様のおうちへ持つて行つた。

十六、お客さま

明け方の光りが山の上を眞赤に染め、さわやかな風が樅の木を吹き抜けて、古い枝をさやめかせてゐた。ハイデイはその音で目を覺ました。木の枝の風に鳴る音を聞くに、いつもハイデイは心を深くかき立てられ、たまらなくその方へさ惹きつけられるのだつた。今もハイデイは寢床から跳び起きるに、手早く着物を着換へた。この頃はいつもきちんご身なりを整へておくやうに氣を付けるので、それはかなり手間取つた。

ハイデイが梯子を降りて見るに、おぢいさんはもう小屋の中にはゐなかつた。外に立つて、毎朝する通り、今日のお天気工合を調べる爲めに、空を見上げたり、景色をながめたりしてゐた。

空は茜あかねいろの雲を浮べて、刻一刻に青さを増して輝きわたり、高原や牧場は、今し山頂にあらはれた朝日の光りを受けて、金いろに變つて來た。

「まあ、なんてきれいなんでせう。おぢいさん、お早う！」

ハイデイは駈け出して來て叫んだ。

「おや、もう起きたのかね」

ハイデイは樅の木のまごころへ行つて、大好きな枝のさやめきに聞き入つて、風が枝を一さゆすりする毎に跳んだりはねたり叫んだりした。

その間におぢいさんは山羊のお乳をしぼりに行つた。それがすむに、山へ連れて行けるやうに、ブラシをかけて洗つてやつて、小舎から連れ出して來た。ハイデイはその二匹のお友達を見付けるに、駈け寄つて抱いてやつた。するに山羊たちものを鳴らして、競争で甘つたれながら、頭をすり寄せたり、押しして來たりするので、ハイデイは二匹に挟まれてつぶれさうになるのだつた。けれ

「今日は一緒に行けるの？」
 断はられたくない色をあり／＼見せて訊ねた。

「行けないと思ふのよ。だつて、フランクフルトから、いつ何時お客様がいらつしやるかわからな

「いけなわ、『小熊』ちゃん、あんたはまるで『トルコ人』みたいぢやないの」

「ミ叱つただけだつた。するに『小熊』はすぐに頭を引つ込めて、もう亂暴な眞似は止めてしまつた。『小さい白鳥』の方は、頭をそば立て、『わたしは『トルコ人』みたいだなき』人の口の端にかゝるやうなこきはしませんよ」

「毎日云はなきやならないわ。お客さまがいらつした時にわたしがゐらないんでせうだからゐなきやならないのよ。」

「でも云つてゐるやうな顔付きをした。『小さな白鳥』は『茶色の小熊』なきよりも、すつミ上品だつたから。」

「おなじことばつかり云つたら『ベーター』は不服だつた。」

「ベーターの口笛が聞えて、大勢の山羊たちが跳んだりねたりしながらのぼつて来た。ハイディはたちまち騒々しい山羊の群れにあちこちから押されながら、すつかり取り圍まれてしまつた。その中をやつミのこゝで、来たくても來られないでゐるおきなしい『ゆき』のこゝろまで行つてやつた。」

「をちさんがゐるぢやないか」
 「ベーターは唸るやうな聲で云つた。だがこの時、おぢいさんの高い聲が聞えて来た。『軍隊は何故行進しないのぢや。落伍者は隊長か、兵隊か』」

突然ベーターがミ、つもなくけたたましく口笛を吹いた。自分でハイディに話があるので、山羊たちを追ひ散らす爲めだつた。やつミハイディのそばへ行き、

途端にベーターはくるりミ向き直り、ヒュウーツミ鞭を鳴らした。山羊たちはこの合圖を聞き分けて、山の牧場へミ大急ぎで駆け出し、ベーターはその後を追つて行つた。

ハイディはおぢいさんのこゝろへ歸つて来てか

ハイディはおぢいさんのこゝろへ歸つて来てか

らは、せんには思つても見なかつたこゝまで氣が
付くやうになつた。この頃では、朝起きるこゝま
づせつせ自分の寢床を片付け、階下に降りて行
つて椅子をみんな元のこゝろに置きなほし、そこ
いらに出しつばなしのものがあれば戸柵にしま
ひ、雑布を持つて來て椅子に上つてテーブルを磨
き、ピカピカ光らせるのだつた。おぢいさんは外
から這入つて來るこゝ、よく上機嫌であたりを見ま
はして、ひこりこゝを云つた。

「毎日まるで日曜日みたいぢやのう。ハイディを
あそこへやつたのも、まんざら身のためになら
んでもなかつたわい」

ペーテルが行つてしまひ、ハイディもおぢいさ
んが朝御飯をすませるこゝ、ハイディはいつものお
掃除をはじめたが、今日はなかなか捗らなかつた。
外はよいお天氣で、いろんなこゝが次ぎ次ぎ起
つて來ては、ハイディのお仕事を途切らせるのだ
つた。一ミすぢの金いろに輝くお日様が、元氣一
ぱいに窓からさしのぞけば、「ハイディや出ておい
で!」、こゝ呼んでゐるやうな氣がして、ハイディ
はもう内にちつこしてゐられなくなり、ついつり
こまれて跳び出してしまふのだつた。お日様は小

屋のまはり一面に、山の上に、すつこ遠くの谷あ
ひに、キラキラ光り輝いてゐた。草原の斜面は
あたゝかさうに金いろに輝き、あんまり氣持よさ
さうなので、さうしても一度その上にすわつて、
あたりの景色を見まはして見ないではゐられな
かつた。するこゝ急に、自分の腰掛けをお部屋のも
中にほうりつ放しにして來たこゝや、テーブルが
まだよく光つてゐなかつたこゝが思ひ出され、ハ
イディは又家の中にさび込むのだつた。けれども
ぢきに又、樅の木がなつかしいあの歌をうたひ出
すこゝ、手足がむづ／＼して來て、さうしてもぢつ
こしてゐられなくなり、跳び出して行つては、枝
の鳴る音に合はせて踊り出すのだつた。仕事小屋
で働いてゐるおぢいさんは、時々戸口まで出て來
て、ハイディの跳ねまはつて遊んでゐるのを、に
こにこ眺めてゐた。今も丁度さうやつて出て來
たあこで、又仕事にさりがらうとした途端、ハ
イディが叫び立てた。

「おぢいさん、おぢいさん、たいへんよ、いらつ
しやーい!」

おぢいさんはハイディがさうかしたのかこゝ、慌
てゝ飛び出して見るこゝ、ハイディは山道の下り坂

になつてゐる方へ、ぎんく駆け出して行くころだつた。

「お客さまがいらしたのよ、いらしたのよ、お医者様が先頭よ！」

ハイディがお迎へに駆けつけるを、お医者様は両手をさし出して挨拶した。ハイディはその手にぶら下りながら、うれしさうに叫んだ。

「先生、いらつしやいませ。それから、ほんまにありがたう」

「おやおや、何のお禮ですね」

「おぢいさんさ、又一緒にねられるやうに、うちへ歸して下さつたからですわ」

お医者様の顔は、急にさつさ日の光りが射したやうに輝いた。こんなに悦んで迎へられようとは思ひもかけてゐなかつた。さびしいもの思ひに沈むのあまり、あたりの景色にも目もくれず、のぼるにつれて展げて来る展望の美しさにも氣も付かずに登つて来た。ハイディは二度しか會つてゐないから、自分なごもうすつかり見忘れてしまつてゐるだらうし、しかも待ちに待つた當のお友達をもつれず、いはばがつかりさせる爲めにやつて来たやうなものであるから、歓迎されようなごも

は、さらさら思つてもゐなかつた。それなのに、今ハイディは、歡びに眼を輝かせ、なつかしさうにお禮をこめて、腕にまつはりついて來るのである。お医者様は父親のやうにやさしく、ハイディの手をぎつた。

「さあ、おぢいさんのところへ案内して下さい。それから、おうちも見せてくれますね」

けれどもハイディはなほも突つ立つたまゝ、不思議さうにちつさ下の道を見つめてゐた。

「クララやおばあさまはー」

「ああ、いよいよあんたをがっかりさせるごころ云はなくちやなくなつた——實はね、ハイディちゃん、わたしは一人で來たのですよ。クララは病氣がわるくて、ミても旅行出來ないので、おばさまもお止しになつたのです。だけき、來年の春になつて、暖く日も長くなつたら、その時こそ、きつみやつて來ますよ」

ハイディには、長い間、あんなにも楽しみにしてゐたごころが、結局實現されずに終るなごさいふごころが、はじめはごうしても信じられなくて、一二分の間、この思ひがけぬ失望に、身動きもしないで立ちつくしてゐた。お医者様は、その上もう

何も云はなかつた。あたりはひつそりミしてゐた。樫の木の溜め息だけが、二人の立つてゐるミころまで聞えて來た。するミハイディは、何の爲めに自分がここへ駆け出して來たのかミ云ふこと、お醫者様がほんたうに目の前に來ていらつしやるのだごいふことを思ひ出し、お醫者様を見上げるミ、ミてもミても悲しさうな顔をして、ぢつミハイディを見下ろしてゐた。フランクフルトにゐた頃は、お醫者様は決してこんな悲しさうな顔はしてゐなかつた。その顔は、深くハイディの心の底までしみ込んだ。ひミが、殊にこの大好きなお醫者様が、こんな悲しさうな顔をしてゐるのは、ハイディには氣の毒で見えてゐられなかつた。きつミクララミおばあさまが來られないからだミ思ひ、ハイディは一生懸命にお醫者様をなぐさめてあげた。

「春なんか、ぢき來ますわ。そしたら、二人ミもきつミいらつしやるのですものね。ここちや目が經つのが、ミつても早いのですよ。春になつたら、今よりかもつミ長くゐられるのですもの、クララだつて、うれしがるでせうね。さあ、おぢいさんを見付けませうよ」

お醫者様の手を引つ張りながら、ハイディはぎんぎん小屋の方へのぼつて行つた。ハイディはぎんかして、お醫者様を元のやうに元氣にして上げた。いミ思つて、なほも熱心に、山では冬はぢきにすんで夏になつてしまふことな話してゐるうちに、自分で自分の言葉を信じ込んでしまひ、すっかり元氣な聲でおぢいさんに叫んだ。

「今日はね、クララたちはいらつしやらないのよ。だげ、もうぢきいらつしやるわ」

ハイディはこのお醫者様のことは、何でもおぢいさんに話してあるので、おぢいさんは始めて會つた人のやうな氣がしないで、打ち解けた様子で、お客様に手を差し出して迎へた。二人は小屋の前に腰をおろし、お醫者様はハイディにもそばへ來て坐れミ手招いた。お醫者様は、ゼーゼマン氏の熱心なため、代理ミして訪ねて來たこと、自分も長い間からだがすつきりしないので、からだの爲めにもよからうミ思つてやつて來たことをおぢいさんに話し、ハイディには、今にフランクフルトから、わたしなどがやつて來たことよりも、もつミもつミあんたの喜ぶいいものが届くからミ囁いた。ハイディは何かしらミ、はしやぎまはつた。

おぢいさんはお醫者様に、この美しい秋日和の間、幾日でも山に逗留するやう、この小屋は狭くてお泊めすることは出来ないが、ラガツ温泉まで歸らずに、麓のデルフリに一寸した宿があるからそこに泊つて、お天氣のよい日に登つて来るやうにさすめた。毎朝早く山に登ることは、お醫者様のからだの爲めにぎんなによいかわからないし、望みさあらばこの山ぢうさこへでも案内しよう云つた。お醫者様は大層よろこんで、おぢいさんのいふ通りにするこゝに決めた。

その間に日は高くのぼつて、お晝になつてゐた。風は風ぎ、樅の木も枝をおさめた。こんな高い山なのに、不思議に日の光りは暖く和やかに、ぽかぽかしたぬくもりには、かぐはしい新鮮さがまじつてゐるのだつた。

おぢいさんは立ち上つて、内からテーブルを持ち出して来て、三人の前に据ゑた。

「さあハイディ、食事の道具を持つておいで。先生、ごらんの通り、なんのお構ひも出来ませんが、まあこの立派な食堂に免じて、我慢していただくさしませうかい」

「ごや、全くですや」

お醫者様は日に輝く谷間を眺め渡し乍云つた。「それに、御心づくしの程、厚く御禮申し上げます。ここでは何をいただいても、きつさおいしいでせう」

ハイディは蜜蜂のやうに忙がしく、印度も行つたり來たりしながら、戸棚ぢうのものを持ち出した。お醫者様をおもてなしするお手傳ひの出来るのが、うれしくつてたまらなかつた。おぢいさんはその間に食事の支度をして、しぼり立てのほかほか湯氣の立つお乳や、狐いろにこんがり焼いたチーズや、手製の燻し肉の薄切りなぎを、次ぎ次ぎ出して來た。お醫者様はこの一年間さいふもの、こんなにおいしいと思つたこゝがない云つて喜んで、それを食べた。

「クララをさうしてもこゝへつれて來なくちゃいけませんな。きつさ生れ變つたやうになりますよ。今日みたいにおいしく、クララも食が進めば、見違へるほさ肥えて來ますからね」

お醫者様がかう云つてゐる時、一人の男が大きな荷物をかついで登つて來た。小屋に著くさ、さしんさそれを地面に投げ出し、ふーつさ深く二息三息山の空氣を吸ひ込んだ。